

2021年(令和3年)3月24日

## 病院長からの一言 Beyond COVID-19

弘前大学医学部  
附属病院長 大山 力



いよいよ新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のワクチン接種が始まりました。ワクチン接種が進んでいるイスラエルやイギリスでは、感染率と死亡率が著明に低下しているとの報告

がありますので、本院でも粛々と進めて参ります。

新型コロナウイルス感染症の状況はまだまだ予断を許さず、身近なところで大きなクラスターも発生してい

ます。また、変異株だけでなく第二、第三の新型コロナウイルスへの備えも必要です。本院としましては、新型コロナウイルス感染症対策に万全を期して特定機能病院、大学病院としての役割をしっかりと果たしていくという一貫した方針には変わりはありません。先日、本院はISO9001マネジメントシステムの審査を受け、新型コロナウイルス感染症対策がグッドポイントとして評価されました。皆様には多大なるご負担をおかけしておりますが、本院全体がOne Teamとして迅速に機能し、人類の難敵にしっかりと対応できているという評価ですので、この場をお借りして御礼を申し上げますとともに、引き続きご協力をお願い申し上げます。

さて、新型コロナウイルス感染症に対応している中で、これまでの生活や

業務のあり方に様々な気づきがありました。受診控えや電話診療による外来患者の減少は、本院が本来対応すべき患者像を再認識する良いきっかけになりました。また、密を避けるために会議が短時間化、オンライン化され、学術集会の多くもオンライン化されました。この過程のなかで、オンラインで十分対応できる事とどうしてもオンライン化できない業務があることがわかってきました。このようなことは今後の業務改善や働き方改革に活かされていくものと思います。

そして、高速大容量・高信頼低遅延

通信技術を基盤に遠隔医療の扉も今まさに開かれんとしています。袴田健一副院長のご尽力で日本外科学会が、AMEDの支援を受けて展開する遠隔手術プロジェクトが本院で進行中です。産学官の協力の下、本院とむつ総合病院を高速ネットワークで結んで遠隔ロボット支援手術を実施する実証研究が行われています。医師不足や医療の地域格差の打開策になるのはもちろん、働き方改革、遠隔医療技術輸出による経済効果など国際医療貢献も期待されます。COVID-19の先に曙光が見え始めています。

## 各診療科等の紹介

### 【産科婦人科】

産科婦人科は、周産期、婦人科腫瘍、生殖・内分泌、女性ヘルスケアの大きな4本柱によって、すべての年代の女性の健康をカバーしている診療科です。

周産期は、母胎ならびに胎児の診療を扱う分野で、2020年の出産件数は270件、そのうち帝王切開が84件でした。地域周産期母子医療センターに認定され、青森県全域から秋田県北部にいたるまでの周産期医療をカバーしています。婦人科腫瘍は、悪性腫瘍(子宮頸癌、子宮体癌、卵巣癌など)を主に扱い、治療は手術、抗がん剤治療、放射線治療と多岐にわたりますが、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬の開発により遺伝子治療も臨床応用が進んできています。正確な病理診断、放射線診断が欠かせないため、他科とのカンファレンスもさかんに進んでおります。生殖・内分泌は、簡単に言うと不妊治療を行う分野です。人工授精などの一般不妊治療や体外受精・胚移植の高度不妊治療に加え、最近ではがん生殖医療も増えてきています。各分野のがん治療の進歩に伴って治療することも可能となりつつあり、その後の人生のQOLが重視されてきています。特に妊娠・出産は最重要項目にあたり、がん治療前



に妊孕性温存を希望される方も増えてきました。女性ヘルスケアは更年期周辺の疾患をメインに扱ってまいりましたが、最近ではスポーツ医学分野にも発展し、リハビリテーション科、整形外科と共同で女性アスリート外来が新設される予定です。利用可能なエネルギー不足、無月経、骨粗鬆症の三主徴の問題が叫ばれており、プロアマ問わず女性アスリートのベストパートナーとなれるよう努力していきたいです。その他、腹腔鏡手術やロボット支援手術による低侵襲手術なども行っております。特に本院は東北・北海道では唯一のロボット手術症例見学の受入施設となっています。

近年、女性医師が多くなってきておりますが、このように関連分野は多岐にわたり、一人一人頑張っており、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

(産科婦人科 外来医長 横田 恵)

## 看護部長退任にあたって

定年退職を迎えて～溢れる感謝の想い～

看護部長

小林 朱実



弘前大学教育学部を卒業し、昭和59年に就職し小児科、耳鼻咽喉科、麻酔科等の領域を経験しました。その後副看護部長12年、任期制の看護部長として2期8年務めさせて頂きました。多くの皆様に育て支えて頂き、感謝の言葉しかありません。副看護部長時代はISO9001の審査準備を担当し、品質マニュアルや仕組み作りにも苦慮しました。また、事務の方と一緒に、休日返上で文部科学省のGPの応募書類を作成したことも思い出深いです。

看護部長の8年間は、ICU増床、SCU設置、総合患者支援センター開

設、ハイブリッド手術システム、外来化学療法室増床など病院の発展とともに、看護部も700人を超える大所帯になりましたが、7対1や必要度の維持はまさに綱渡りの日々でした。診療科や事務部門にご協力頂き、感謝の念に堪えません。

患者の命と生活を支えること、職員の成長と生活を支えること、患者と職員そしてその家族の幸せを願い、取り組んできました。手術看護手当などの処遇改善や入院セット、13時間の二交代制、夜勤ユニフォーム、HRジョイント導入など多くの業務改善にご支援頂きました。多くの職員の

努力により、看護の質や患者評価は年々向上しています。また、職員が健康でやりがいをもって働き続けるために、検診の推進やプレミアム dayなど働き方改革も行い、少しずつ改善されてきました。

キャリア支援制度も充実し、認定看護師は新たに8名、初の専門看護師も誕生し、看護の質向上に貢献しています。次年度は特定行為研修修了者も誕生します。活躍が楽しみです。

今コロナ禍で看護職が耳目を集めていますが、経験年数が少ない職員の割合も増えている中で、チームで協力し合い、懸命に患者・家族を支えています。とても誇らしいです。未来の病院を牽引していく看護職員へのご支援を今後ともよろしくお願い致します。

最後に職員の皆様はじめ、全ての方々に心からの感謝の気持ちをお伝えし、附属病院の益々のご発展と皆様方のご健康を心より祈念しております。

## 新任科長の自己紹介

小児科科長 照井 君典



この度、令和2年12月1日付けで小児科科長を拝命いたしました。自己紹介を兼ねて就任のご挨拶を申し上げます。出身は岩手県の花巻市です。中学、高校とサッカー中心の生活を送り、昭和61年に地元の花巻北高校を卒業後、弘前大学に進学しました。大学でもサッカーを続け、よく遊びよく学ぶ学生生活を送りました。

平成4年に大学を卒業すると同時に小児科に入局しました。入局後、県内外の関連病院で一般小児科を学び、後に東日本大震災で大きな被害を受けることとなる岩手県立高田病院では、市内唯一の小児科医として1年間地域医療に携わりました。平成10年に大学に戻ってからは血液グループに所属し、小児の血液疾患や小児がん、骨髄移植などの造血幹細胞移植を中心に診療に当たってきました。

小児がんは治療の進歩により70～80%以上の患者さんが治るようになりましたが、現在でも小児の死因の上位を占めています。さらなる治療成績の改善のために、オールジャパンの臨床試験が常時20以上行われていま

す。私たちは臨床試験に参加するばかりではなく、試験を計画、実施する委員や、特殊な遺伝子解析を行う中央診断施設としての役割も果たしており、国内で発生するDown症候群の白血病のほとんどの患者さんが、当科で遺伝子診断を受ける体制となっています。また、難治性の血液疾患や小児がんなどの患者さんに対して、これまでに200回以上の造血幹細胞移植を行ってきました。最近では、少子化に伴う家族内HLA適合ドナーの減少などの影響で、HLA不適合移植など難易度の高い移植の割合が増えています。

小児は成長・発達の途上にあり、入院中であっても、遊び、教育、家族支援など特別な配慮が必要です。これからの小児科病棟は、各病棟に分散している小児患者さんを集約化した小児医療センターとしての役割を担うことが期待されています。青森県の小児医療の発展のため、これからも皆様のご指導、ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い致します。

## 新任科長の自己紹介

呼吸器外科科長 心臓血管外科科長 皆川 正仁



令和3年2月1日付けで、呼吸器外科科長、心臓血管外科科長を拝命いたしました。自己紹介を兼ねて就任のご挨拶を申し上げます。

私は、青森市の出身で現在の新青森県運動公園がある地域で生まれ、青森高校から弘前大学へ進学しましたので、生粋の青森県民です。大学では医学部硬式テニス部に所属し、私はレギュラーになることは出来ませんでした。1年目には東医体3位、4年目の幹部学年の時には北医体の幹事を務め優勝を経験し、忙しいながらも充実した学生生活でありました。卒業後は、旧第一外科学講座に入局し、大学院に入学しました。入局の同期は7名と多く、現在も青森県内で6名の

同期が頑張っております。

心筋保護に関する研究で学位を取得後は、青森労災病院心臓血管外科で2年間、臨床経験を積ませて頂きました。当時は、心拍動下冠動脈バイパス手術(OPCAB)が全国的にまだ普及していませんでしたが、年間100例以上のOPCABの第一助手をすることができ、2年間で400例以上の総手術経験は、その後に自分が執刀する際の大きな臨床経験となりました。2002年からは旧第一外科に戻り、以降は留学期間を除き大学で福田幾夫前教授のもとで研鑽を積ませて頂きました。留学は2008年8月から2年間、米国ペンシルバニア大学で心筋梗塞後僧帽弁閉鎖不全症に関する研究を行い、連日、ブ

タやヒツジ、ときにはウシの心臓手術を行い、貴重な経験となりました。帰国後は特に、胸部大動脈手術、心臓弁膜症手術、冠動脈バイパス手術の多くに携わらせて頂き、全国水準以上の手術成績を維持できております。

これまで、多くの先生方や医療従事者の方々にお世話になり今の自分があると思っております。今後は、これまでの御返礼として後進の育成に専心することはもとより、「青森県において最高の医療を提供する」ことを理念に日々の診療や研究に努めて参ります。みなさま、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

## 先憂後楽

新型コロナと子供の眼



眼科科長 中澤 満

世界中が新型コロナ禍で翻弄されている現在、3密回避、マスク着用や手洗い徹底などの個人レベルでの対策が講じられるようになり、感染予防にある程度の効果があることが認められるようになりました。今後はワクチン接種により集団免疫を獲得して何とか終息の方向へと進むことが期待されます。一方で、今回のコロナ禍ではこれまで気づきにくかった様々な人間の性質が改めて明らかにされてきています。まず、人間は社会との交わりをとて好む種族であるという点です。これが制限

されて一人で家にいる時間が長くなると精神的に疲労してうつに陥る人が増えるということが分かりました。テレワークも人との直接の関わりがない分ストレスが貯まり、さらには長時間の座り仕事の影響で腰痛患者が増えることも分かりました。また、学童期の子供達も家の中での生活が長くなると近業作業時間が長くなり、近視が増えることも明らかになってきています。学童期の近業作業に伴って近くにピントを合わせ「調節」という働きを酷使することで、その負担を軽減させようとし

て眼球が前後に伸びる一種の身体適応の結果、近視は進行します。この前後径(眼軸長)の伸びは不可逆性ですので、一度この眼軸近視になりますともはや元には戻りません。これは生物学的な「進化」と呼べるのでしょうか。不思議です。しかも近視は壮年期、老年期になって網膜剥離、緑内障、黄斑変性などのリスクとなりますので「近視は眼の万病の元」と言っても過言ではありません。生体にとって不利な「進化」なのかもしれません。対策として、アウトドアで1,000ルクス以上の光を2

時間浴びるとドーパミンが分泌されて眼軸の伸びを抑制することや、低濃度アトロピン点眼や遠近両用眼鏡装用などの効果が医学的に知られるようになりました。実際に台湾では、小学生の屋外授業を積極的に施行して近視化の抑制に成功しています。将来の緑内障患者を増やさないための「総合的、俯瞰的」な対策として、今後は子供の近視予防も疫学上重要な観点となるでしょう。新型コロナをかけて近視と解く。その心は、「どちらも予防が大切です」。お粗末でした。

## 令和2年度弘前大学医学部附属病院診療奨励賞授賞式が行われる

令和3年1月22日、第23回附属病院診療奨励賞授賞式が医学部学術賞授賞式と共に、新型コロナウイルス感染予防のため規模を縮小して医学研究科大会議室で執り行われました。式では受賞者に、大山病院長から本賞の盾及び副賞として一般財団法人弘仁会から寄附金が贈呈されました。今年度の診療技術賞は、救急・災害医学講座、高度救命救急センター(代表者 野村理 他36名)の「順応性を追求した Do-it-yourself スタイルの COVID-19 診療体制の探求」、多職種から構



成されるハートチーム(代表者 横山公章 他各部門から7名)の「経カテーテル的大動脈弁留置術(TAVI)実施に関わるハートチームの活動実績」、心のふれあい賞は、第二病棟3階(代表者 中村美香 他23名)の「産褥期の心に寄り添う看護」が受賞しました。

### 経カテーテル的大動脈弁留置術(TAVI)実施に関わるハートチームの活動実績

弘前大学ハートチーム  
医師 循環器内科、腎臓内科 横山 公章 呼吸器外科、心臓血管外科 齊藤 良明 麻酔科 竹川 大貴  
看護師 齋藤夏奈子 臨床工学技士 紺野 幸哉 診療放射線技師 葛西 慶彦 臨床検査技師 佐々木史穂  
理学療法士(リハビリテーション担当) 石岡 新治

#### ○診療技術賞を受賞して

代表 循環器内科、腎臓内科  
講師 横山 公章

このたび大変名誉ある医学部附属病院診療奨励賞診療技術賞に弘前大学ハートチームが選ばれました。大変光栄なことであり、チームを代表して御礼申し上げます。

弘前大学ハートチームは、循環器内科や心臓血管外科、麻酔科など各講座医師のみではなく、看護師や臨床工学技士、診療放射線技師、臨床検査技師、リハビリテーションスタッフなど数多くの職種からなるメンバーで構成されています。このチームが結成されたのは、経カテーテル的大動脈弁留置術(TAVI:タビ)を弘前大学で実施しようと計画されたことがきっかけです。TAVIは高齢で基礎疾患などがあるために開胸手術が困難あるいはハイリスクな重症大動脈弁狭窄症の患者さんが対象となり、ハイブリッド手術室にて多職種から構成されるハートチームによって治療を行うことが、TAVI実施施設の認定要件となっています。本院でのTAVI実施にむけて、ハートチームでTAVI手技に関するシミュレーションを積み重ね、また各部署での勉強会などを通じてTAVI周術期管理に関するイメージを共有できる環境を作っていました。2019年春に念願のハイブリッド手術室が完成し、2019年11月5日に青森県初のTAVIが実施され、2021年1月下旬までに約70人の患者さんにTAVIが実施されました。高齢で手術リスクの高い患者さんに対して

安全にTAVIを実施し、ADLを低下させることなく自宅退院へ導くことは簡単なことではありません。TAVI自体を安全に行うことはもちろんですが、術後早期からのリハビリテーションや看護、退院後の生活指導など周術期ケアは多岐にわたります。本院でTAVIが実施された多くの患者さんが、自覚症状の改善が得られ元気に自宅退院されています。あらためてチームメンバーにも感謝したいと思います。



今後も弁膜症に対する新規カテーテル治療が本院で開始される予定で、ハートチームでトレーニングを行っているところです。弘前大学ハートチームの活躍をこれからも温かく見守っていただければ幸いです。

### 産褥期の心に寄り添う看護

看護部 (第二病棟3階) 中村 美香、阿保 都子、浜谷みゆき、常田 正美、古川 成子、村岡ちひろ、水木真知子、伴 恩恵、前田あかね、奈良 曜子、花田 歩美、対馬 有加、江利山咲子、中田 花織、阿部 浩江、



#### ○心のふれあい賞を受賞して

代表 看護部(第二病棟3階)  
助産師 中村 美香

この度は、弘前大学医学部附属病院診療奨励賞心のふれあい賞を頂き、誠にありがとうございます。選考委員の諸先生方ならびに関係者の皆様へ心よりお礼を申し上げます。

近年、周産期うつ病による自殺は周産期死因で最多となっています。母子が心身共に健康に過ごし、周産期のうつ病や自殺・虐待を予防するため、周産期のメンタルヘ

ルスケアの重要性が指摘されており、医療と行政が連携して早期発見・早期介入をする必要があります。

本院では、2017年からエジンバラ産後うつ病質問票(以下、EPDS)を褥婦全員に記入してもらい、面談を行い、精神状態や育児サポートをアセスメントして、必要時は妊産婦連絡票で地域保健師と連携しています。昨年はEPDS 259件のうち、要連絡・指導妊産婦連絡票送付となったのが50件でした。また、産後うつ病は家族や友人の気づきが重要であるため、パンフレットで家族への周知をしました。本院には高齢出産や合併症を有するハイリスクの妊産婦、精神疾患合併の妊婦が多くいます。更に今年度は、新型コロナウイルスの影響で、支援者・相談者が不在の

褥婦も多く、産後うつ病のリスク上昇が予想されました。そのため母児が安心して過ごせるよう、スタッフ一丸となって、全褥婦に退院後の電話訪問を実施し、育児外来・1か月健診、地域へつなげることに重点的に取り組みました。EPDS面談時は流涙しながら「自分を責める気持ちを言い出せずにいたが、やっと話せた」と思いを表出できたり、電話訪問では「気軽に相談できて助かった、電話をもらえて嬉しかった」等、精神的

不安の軽減につながる意見が多数聞かれました。

EPDSや退院後の電話訪問は、産後うつ病の早期発見・早期介入、精神科の早期受診のきっかけとなり、妊産婦連絡票を用いた多職種連携は、地域での見守り・支援の継続、虐待の早期発見・予防につながります。今回の受賞を励みとし、一層患者、家族の心に寄り添う看護を目指していきたいと思

## 令和元年度ベストやまびこ賞、Good Approach賞、Good Job賞 表彰式を開催



患者さんからの感謝の投書による病院のイメージアップや日常業務の中で職員のキラッと光る診療行為についても表彰したいという、前福田病院長の発案により創設されたベストやまびこ賞、Good Approach賞、Good Job賞ですが、その意志を大山病院長も引き継ぎ、令和2年11月4日に表彰式を執り行いました。

ベストやまびこ賞とは、患者さ



んからの投書のうち感謝の投書が多い部署を表彰するもので、消化器内科/血液内科/膠原病内科、内分泌内科/糖尿病代謝内科、第一病棟6階、第一病棟7階、リハビリテーション部の5部署、Good Approach賞とは、インシデント報告のうちレベル0の報告が多い部署を表彰するもので、消化器内科/血液内科/膠原病内科、放射線診断科、第一病棟2階/R1病棟、手術部、薬剤部、輸血部の6部署、Good

Job賞とは、コミュニケーションを通して間違いに気付き医療事故を未然に防いだ個人や団体を表彰するもので、第二病棟5階の木村素子副看護師長が受賞されました。

受賞された部署等には大山病院長から表彰状と副賞が贈呈され、患者さんに寄り添ったケアと医療安全推進のための取り組みに対して労いと期待の言葉がありました。

今回、受賞されなかった部署等におかれましては、感謝の投書やインシデント報告による医療安全への取り組みがありますので、次回にはたくさんの皆さんが受賞されますことを願っております。

(医事課)

## 順応性を追求した Do-it-yourself スタイルの COVID-19 診療体制の探求

救急・災害医学講座 野村 理、花田 裕之、伊藤 勝博、矢口 慎也  
高度救命救急センター 石澤 義也、市川 博章、入江 仁、西谷 佑希  
看護部(高度救命救急センター)  
石川 啓介、尾崎恵理香、尾野美沙子、葛西 美里、葛西 美保、川村 萌、工藤 和枝、小林 莉奈、今 愛子、今 美香、齋藤麻里絵、佐藤 絢子、佐藤 巴恵、須藤 典子、高橋結喜子、田中 小鉄、田中百合子、対馬真菜美、坪田 明憲、成田亜紀子、原田 知佳、古館 周子、松江 聖乃、三浦 崇、三上啓二朗、三上 純子、安原 逸実、吉田 友紀、若松 涼子

#### ○診療技術賞を受賞して

代表 救急・災害医学講座  
助教 野村 理

このたび診療奨励賞(診療技術賞)を賜ることとなり、大変光栄に存じます。

まずは、新型コロナウイルス(COVID-19)感染診療に多大なご協力を頂いている院内各診療科・部門の皆様、そして特に臨床工学・放射線・検査・感染制御部門の皆様には、昼夜を問わない献身的なご支援を頂き、心より御礼申し上げます。

COVID-19感染拡大に伴い、救命センターに求められる機能は患者数やその重症度により変化します。今回、本学附属病院高度救命センターではその順応性を最大限にするために、「順応性を追求したDo-it-yourselfスタイルのCOVID-19診療体制の探求」と題して、Do-it-yourself(DIY)と呼ばれる自作的要素を特徴とした新たな感染対策を導入しました。これは、高度救命救急センター救命病棟内に感染対策ゾーンを見える化する設計構造「DIYゾーン」の導入と、COVID-19症例(もしくはその疑い)への気道管理に伴うエアロゾル拡散を最小限にするための気道管理ボックスである「DIY Disposable Aerosol Box」の開発及び導入の二つから構成されています。

「DIYゾーン」では当初、木枠とビニールによりCOVID-19症例を管理するレッドゾーンと、それ以外の診療および作業スペースのグリーンゾーンとを試行的に区分し、その実用性の検証を重ねながら、昨年9月末にその運用を確定し正式なゾーン構造を設置いたしました。また、DIY Disposable Aerosol Boxでは段ボール箱とビニール袋などの容易に調達可能な資材を用いて自作

することで、透明アクリル版を用いた通常の気道管理ボックスよりも挿管手技の際の操作性の向上を達成することができます。使用後はその場で廃棄でき洗浄などの必要性がないことも大きなメリットであり、これらの意義はJournal of Emergency Medicine誌に報告しております。

COVID-19診療においては、医療者自身が感染するリスクから我々の精神的な負担は通常の診療とは全く異なるものです。しかしながら、グリーンゾーンを空間として明確に区分して明示することで、少なくともグリーンゾーンでの勤務においては、ストレスを軽減でき、また最も感染リスクの高い気道管理においてもDIY Disposable Aerosol Boxを用いることで、その飛沫への暴露を低減できる可能性があります。

これらの予めの対応により、当センターでは本稿執筆時点において、ECMO管理を要する重症例を含むCOVID-19感染症患者を診療しておりますが、院内感染を生じることなく、診療を継続できております。本年に入り、ようやくワクチン接種が現実的になり、COVID-19感染の感染収束が期待されますが、変異型ウイルスの報告も続き、また新たな課題も出現する可能性もあります。

## 弘前大学医学部附属病院へのご寄附、心より御礼申し上げます

ご氏名の掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、令和2年11月から令和3年1月末までの間にご入金を確認させていただきまして公表させていただきます。(経理調達課)

#### 寄附者ご芳名

山口 道子 様 長瀬紗矢佳 様 四ッ谷裕樹 様  
鎌田 修二 様 森山 裕三 様 石澤 誠 様  
鈴木 秀和 様 菊池 正一 様 水沼めぐみ 様  
匿名希望 8人

※お名前の掲載は順序不同です。

※掲載の同意をいただいた方以外は、匿名希望とさせていただきます。

## 【編集後記】

南塘だより第101号をお届けいたします。お忙しい中、原稿をお寄せいただきました皆様には心より感謝申し上げます。本号では表彰関連の記事を多数いただきました。受賞された皆様には大変おめでとうございます。益々のご活躍を祈念しております。

2020年、新型コロナウイルスのパンデミック宣言から1年が経過しました。当初は対岸の火事として捉えていた出来事があっという間に全世界に飛び火し、見えない敵との長期戦がじわじわと医療現場を疲弊させています。そうした中、本院でもワクチンの優先接種が始まりました。変異株への懸念もあり、収束には時間がかかるといわれていますが、平穏な日常生活が一日も早く戻ってくることを願うばかりです。

(病院広報委員会委員 総務課 中野公雄)